
秘めた想い

すず李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘めた想い

【Nコード】

N0839I

【作者名】

すず李

【あらすじ】

灰原の想いを中心に書いた短編です。カップルモノではなく原作、アニメ等を基本にしています。哀↓コナンの描写的なモノがあります。大丈夫な方はどうぞ。

（前書き）

ぐだぐだなモノになってしまった気がします…。

「やっぱりデータが少なすぎるわね…」

地下室にいる灰原は目の前のパソコンを見つめながら呟いた。
自分が思い出せるだけ思い出した情報とパикаルの成分だけではやはり難しい… APTX4869の解毒剤の完成品を作るには―。
灰原は胸が少しだけ安堵するのを覚えた。

―私はこのままを望んでいる？―

完全な解毒剤が出来たとして、組織を潰し生きていられたとして、その後自分はどうなるのだろうか…？

元の姿に戻っても自分の居場所はあるだろうか？それよりも知らなかったとはいえ、毒薬を作り多くの人を犠牲にし、あの人…工藤新一を苦しめている自分がのうのうと生きていて良いのだろうか…？いや、もう決めているはずだ…組織を潰した後は法の下に身を委ねると…。

しかし、頻繁にこの不安感は襲ってくる…。

でも、最近はその回数も減った気がした。

探偵団の純粹さ明るさ元氣さ、そして犯罪者と変わらない自分を受け入れてくれている彼、工藤新一のおかげかもしれない…。

自分の運命から逃げるなど言った彼、守ってくれと言った彼…。
初めは自分を安心させる為に言った虚言だと思っていた。
しかし、それは偽りではなく真実だった…。

いつか…いつかこの言葉が彼の枷になり、彼自身だけでなく探偵事

務所の彼女をも苦しめる事になるかもしれない…そう分かっているからその言葉を受け入れてしまっている。

いつからだろうか…こんなにも自分の中で彼の存在が大きくなったのは…。

彼と出逢ったのが彼女よりも先なら…自分に何の枷も無い、ただの宮野志保として出逢えていたなら…私にも機会があっただろうか…。

（フツ…何考えてるのかしら…）

灰原は自嘲気味な笑みを浮かべた。

別にこの気持ちを彼に伝えようとは思っていないし気付いてほしいとも思わない。

彼が自分の気持ちを知ったとしても、彼を困らせるだけで何も変わらない…。

彼はいつもたった一人の大切な人の事を揺ぎ無く想っているから…。それにもう、自分の気持ちは…。

灰原は座っていた椅子から立ち上がり、気分転換も兼ねて休憩にコーヒーを飲もうと上への階段を上る。

そして一階に着いた時、彼がいた。

ソファで退屈そうに雑誌を捲っている彼が…。

灰原の視線に気付いたのか、彼…コナンは灰原の方を向いた。

「よお、灰原！」

コナンは灰原に気軽に声を掛けた。

「どうしたの？また博士に変なメカでも作ってもらった？」

皮肉交じりに灰原は言う。

「変なメカつて…。ちげーよ！スケボーの調子が悪かったから博士に診てもらいに来たんだ」

コナンは苦笑交じりに答える。

灰原は辺りを見回すも、確かに博士の姿は見えない。

「そう」

それだけ言うと灰原はコーヒーを入れるべくコーヒーマーカーのある場所に向かう。

「おい、灰原…お前、大丈夫か？」

（え…？）

背中に真剣な声が届く。

振り返るとやはり真剣な顔のコナンがいた。

「どうして？」

灰原は動揺を押し隠し言った。

「いや、何か顔色が悪いかなと思ったからさ」

さっきまで色々と地下室で考えていた事が顔色に出ていたのだろう

か…。

いつも彼の観察力には驚かされる。

「大丈夫よ、ただの寝不足だから…。まあ、あなたとしたら私に何かあったらA P T X 4 8 6 9の解毒剤の開発が進まなくて気掛かりでしょうね」

灰原はそう言って誤魔化した。

「おいおい、そこまで言ってねーだろ！」

コナンは苦い顔をして言う。

灰原は構わず、目的の場所へ。

自分のカップを取り、既に作ってあるコーヒーをそれに入れる。
そこへコナンも来た。

勝手知ったる阿笠の家。自分のカップも置いてある。

そのカップを取り、灰原と同じように入れながら彼女に話し掛ける。

「なあ、灰原…。何でそんなに悩んでるか知らねーけど、あんまり思い詰めるなよ」

「え…？」

灰原は思わず声をもらす。

「俺で相談に乗れる事なら乗ってやるぜ。俺の相棒だしな」

コナンは笑みを見せ、コーヒーが入ったカップを持ってさっきまで座っていたソファの方へ歩いて行く。

「工藤君…」

灰原は小さく呟き、フツと笑みを浮かべる。

いつもそうだ…自分がプレッシャーや不安に押し潰されそうになった時、彼が掛ける言葉は心に重くのしかかった石を砕くように自分の心…気持ちを軽くさせる。

それから灰原もコナンのいるソファの向かいのソファに座り、他愛無いのな話ポツリポツリとする。

出来る事ならこの先に何があってもこの関係が崩れる事のないようにと願いながら―。

（後書き）

こんにちは、すず李です。

いかがだったでしょうか…？

実際、灰原さんがこんな事を思っているのかちょっと分かりませんが、書いてみました。

感想評価等頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0839i/>

秘めた想い

2010年11月11日20時12分発行